

仏さまのはなし

郷音流

~ KOURU ~

発行所

茨城東組事務局
茨城県常陸太田市
久米町20-1
正念寺内



鯨法会 (くじらほうえ)

上宮寺住職 鷲元 明俊

山口県仙崎という港町で生まれた金子みすゞさんに『鯨法会』という詩があります。

鯨法会

鯨法会は春のくれ 海に飛魚採れるころ。

浜のお寺で鳴る鐘が ゆれて水面をわたるとき、

村の漁師が羽織着て 浜のお寺へいそぐとき、

沖で鯨の子がひとり その鳴る鐘をききながら、

死んだ父さま、母さまを こいし、こいしと泣いています。

海のおもてを 鐘の音は 海のどこまで ひびくやら。



この仙崎には毎年冬になると、鯨が子どもを連れて子育てのためにやって来ます。その漁師はその鯨をとって生活の糧にしています。父さん鯨と母さん鯨は、子鯨を間にはさんで三頭でやってきます。そこで漁師達はまず、子鯨を捕まえます。なぜ子鯨を一番先に捕まえるかというと、子鯨を捕まえられた親鯨は決してそこを離れないからです。そして子鯨を必死になつて探します。その習性を知っている漁師は、子鯨を湾の中においておきます。そうしますと

親鯨は湾の中をゆっくり泳いで鳴きながら子鯨を探すのです。その鳴き声があまりにも悲しそうなので、それを聞いた漁師達は思わず手を合わせ「すまん、ゆるしてくれよ、しかしお前たちを捕まえなければ俺たちが生きていけないのだ。すまん、ゆるしてくれよ」と鯨に謝りました。その思いが鯨法会となつて仙崎のお寺にずっと続いています。

今一度この『鯨法会』という詩を見ていただきますと、お寺の鐘の音を聞いて沖で子鯨が「父さま、母さまをこいし、こいしと泣いてます」とありますが、親鯨を捕まえた後、漁師達はこの子鯨を海に帰したのです。親鯨をとられた子鯢の悲しみと、子鯢を探す親鯢の悲しみは相通するものがあります。その思いがお念仏だと味わうことが出来るのです。私たちは阿弥陀如来を親様と慕い、お念仏を申すそのままの聲が、必死になつて子鯢を探す親鯢の鳴き声のように聞かせていただくのです。これは阿弥陀如来が「安心しろ、必ず救う」と呼んで下さるみ声なのです。最後に甲斐和里子さまの歌を紹介いたします。

み仏を 呼ぶわが声は み仏の われを呼びます み声なりけり

合掌



金子 みすゞ(かねこ みすゞ)
大正時代末期から昭和時代
初期にかけて活躍された日本の
童謡詩人。
篤信な浄土真宗の家に育つ。

お寺紹介

第4回



〒311-1245 ひたちなか市館山 9007-1



ひたちなか市館山(旧那珂湊市)は那珂川の河口の北側に位置する高台です。その山内に真宗寺院が七ヶ寺肩を寄せ合うように存在しています。地域の人からは「館山七ヶ寺」と言われたりします。光泉寺はその中の一ヶ寺です。遠景に海の輝きが見えなかなかの眺望です。

「珍しいですね、こんなにお寺が集まっているところは！」

時折、親鸞聖人の研究や他からお参りにいらっしやった方などの問いかけにわたしはこう返事をします。

「江戸時代中期の元禄九年(一六九六年)に近在の真宗寺院を集めたそうです、水戸藩二代藩主徳川光圀の時代です。水戸藩の寺院政策だったでしょう」と。

光泉寺は寺伝によると慶長五年頃(一六〇〇)前渡村前浜(現ひたち海浜公園付近)に了南坊により開基されました。その後館山に移ると記されています。約四百年になる古い寺です。その間に「力精」「皆遵」などの学僧を輩出しましたが、歴史



移築してきた本堂

の波に翻弄されました。殊に幕末から明治にかけての激動の時代、廃仏毀釈や水戸藩内の政争などで焼却されました。

光泉寺の現在の本堂は明治四十二年に那珂川上流域にあった廃寺を解体し、その木材をいかだに組んで運び建立したそうです。

当時の住職や門信徒さんの熱意とご苦勞には頭が下がります。それからも百年余り、その時々門信徒の皆様を支えられ今日に至っています。

光泉寺も八年前に若い世代にバトンタッチを致しました。光泉寺護寺会・仏教婦人会を軸に南無阿弥陀仏のおみのりを悦び合う輪が広がることを念じて居ります。

京都の本願寺では昨年十月から十期にわたり「伝灯奉告法要」が営まれていきます。光泉寺では五月末に茨城東組の各寺院の皆様と一緒に参拝する予定です。よろしくお願ひ致します。

光泉寺前住職 藤 宏遵
合掌



仏教婦人会十周年記念の天水桶

はじめての仏事

第4回

作法のいろは

浄妙寺副住職 那須 信行



前回はお仏壇のあり方について考えましたが、今回から詳しくお仏壇の中



を見ていきたいと思えます。浄土真宗のお仏壇は阿弥陀さまのお心、つまり浄土のはたらきを目に見える形として現したものです。したがって荘厳(おかざり)には1つ1つにそのお心があらわれています。今回はお仏壇の荘厳に欠かせない灯明と仏華についてとにもあじわわせていただきますしよう。

まずは灯明です。お仏壇において灯明は蠟燭、輪灯、金灯籠の3つあります。この灯明は阿弥陀さまの智慧をあらわし光明ともいわれます。親鸞聖人はこの智慧の光明について、「無礙の光明は無明の闇を破する恵日なり」と讃えておられます。無明の闇というのは、「何のためにいきているのか、死んだらどうなるのか」という今を生きる私たちの迷いの心のことです。つまり阿弥陀さまの智慧の光明はその迷いの心の闇を照らし破るはたらきがあります。

次に仏華です。仏華は阿弥陀さまの慈悲のお心をあらわしています。慈悲というのは私たちの考える思い

やりとは少し趣が違います。私たちの思いやりはある限られた人にしかはたらきません。しかし阿弥陀さまの慈悲は、「他の人の悲しみを自らの悲しみとし、他の人の喜びを自らの喜びとする」といったどんな人に対しても分け隔てなくはたらくお心です。残念ながら日常の私たちはその逆ではないでしょうか。

小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもふまじ
如来の願船いままさずは 苦海をいかでかわたるべき

親鸞聖人ご自身も、阿弥陀さまの智慧の光明に照らされる中で無慈悲な我が身であると気づき悲嘆され、阿弥陀さまの慈悲のお心がなければこの無明の闇の世界を力強く歩むことはできないとおっしゃっておられます。

阿弥陀さまの智慧と慈悲のお心をあらわした灯明と仏華。自己中心的な私たちがそのお心に気づこうとしなくても、阿弥陀さまは智慧の光明で常に我が身を照らし続け、そして大慈大悲のお心で寄り添ってくださいます。お仏壇に手を合わせる中で我が身を振り返り、ご恩報謝の生活を送らさせていただきますしよう。

称名念仏



